

## 美術科の主張

### 1 教科で育みたい人間像

美術科では、「感性豊かに創造していく人」を育みたいと考えている。「感性」とよく似たもので「感受性」という言葉がある。この2つはしばしば同じような意味で使われるが、日本語大辞典（講談社）によると「感受性」は「外界の刺激を印象として心に感じ取る能力」、「感性」は「心理学で外界の刺激を受けてそれに対応する感覚内容をまとめる働き。哲学で悟性ととも認識能力を形づくる心の働き」とある。「感受性」は「感覚」の意を含み、「感性」は「理性、判断」の意を含んでいることがわかる。つまり、人やもの、出来事、作品、景色などに出会って、何事かを感じ取る（input）ことにとどまらず、それを理性が咀嚼し、何らかの形で表現（output）することで、初めて豊かに感性が働いていると言えるのである。

感性は、大人が未熟な子どもに教えて身につけさせるようなものではない。例えば、小さな子どもは、身の回りのさまざまな刺激を敏感に感じ取り、「うわあ、きれいな夕焼け空だなあ」「ねえ、見て見て、すごーい！」などと声を上げながら豊かな表情を見せる。そうしたときに、隣にいる大人は表情一つ変えずスマートフォンの画面を見つめていたりする。そのような様子を目にしたとき、大人よりも子どもの方が豊かな感性をもっているのではないかという気持ちになる。年齢を重ね、大人になるにつれて、幼い頃は見えていたものが見えなくなり、感じられていたことが感じられなくなってしまふのだろうか。美術科では、生まれつきもっている感性を眠らせることなく、さまざまな経験を経て成熟した理性により豊かに深められていく人を育みたいと考えている。子どもたちには、美しい夕焼け空を前にしたとき、心を動かし、その感動を絵手紙にして誰かに送ったり、隣にいる人に「あのグラデーションがとても綺麗だね」と言葉で伝えたり、一瞬の色合いをスマートフォンのカメラに収めたりするなど、感じ取ったことを自分なりに表現して誰かと共有できる大人になってほしい。そのような人の人生は、きっと彩りのある豊かなものになるだろう。

昨日までの常識や価値観が一瞬にして変わってしまう世の中を私たちは生きている。最新の高性能 AI が、どれだけ膨大なデータを学習、分析しようとも、所詮は過去のデータから導き出された最適解であり、新たに生み出されたものではない。過去の常識を越え、今はない新しいものやことを創造できるのは、感性を備えた人間だけである。

子どもたちには、感性を豊かに働かせ、発想したり表現したりしながら、自分で未来を創造できる人間になってほしい。そして幸せな人生を送ってほしいと願っている。

### 2 教科で願う子どもの学び

ほとんどの子どもたちは、プロの画家やデザイナーを目指しているわけではない。言うまでもないが、義務教育の美術の授業の目的は、美術の専門家を育むことではない。そもそも子どもたちは、豊かな存在であるという前提に立ち、教師は「教える」存在ではなく、世の中にある造形的な営みを教室にもち込み、「気づきのきっかけを提供する」存在というスタンスでありたい。造形的な視点をもって試行錯誤をしながら表現をしたり、鑑賞をしたりする活動の過程で、子どもたちは多くの気づきを得るだろう。「筆をこのように使うことで自分の出したい感じが出せるのか、次はこうしてみたらどうなるだろう」「当たり前の日常の中に美術やデザインは存在しているんだ。いつもと街の見え方が変わった」など、様々な気づきを得ながら input と output を繰り返す中で、今まで自分の中になかった新たな意味や価値を見いだしていく。ここで言う「新たな意味や価値」とは、今まで自分の中になかった色や形に関する造形的な見方や考え方、そして新たに見つけた自分や他人の個性やよさのことである。そのため、子どもたちが作品という結果のみにこだわるのではなく、活動の過程や自身の変容などに意識を向けられるような題材構想を心がけたい。

目の前の作品から子どもたちの意識が自分自身に向き、発想豊かに創造する喜びを実感できたとき、子どもたちにとって美術科の学びが生涯にわたって学び続けようと思える価値のあるものになるのではないかと考えた。以上のことから、美術科で願う子どもの学びを「感性を豊かに働かせながら試行錯誤や対話を繰り返し、造形的な気づきを重ね、新たな意味や価値を見いだすこと」とした。願う子どもの姿を常に頭に思い浮かべながら、授業改善に努めていきたい。